

(新井紀子のメディア私評) 大学入試の新テスト 実現可能性・公平性、真摯に検討を

有料記事

2019年1月16日05時00分

センター試験の後継となる「大学入学共通テスト」（新テスト）の本格実施が2年後に迫った。現高校1年生は新テストを受験することになる。が、二転三転でいまだ全容は見えない。

事の起こりは、2012年8月、民主党政権下の平野博文・文部科学大臣が中央教育審議会（中教審）に対し、高校教育と大学教育の円滑な接続を目的とした大学入試改革に関する諮問を行ったことにある。民主党政権下の政策の多くが自民政権下で尻つぼみになったが、入試改革は例外的にかえって強硬になった。その方向性を決定付け、主導したのは長く中教審委員を務め、14年から会長に就いた元慶応義塾塾長の安西祐一郎氏だった。

*

国語で記述式問題をAIに採点させるという奇策が提案され、研究予算も投入された。海外のトップ研究者に「文脈も考慮に入れた上で、任意の短文の同義性を判定する技術は実用段階にあるか？」と尋ねれば、相手にされないはずだ。

「もはや大学は1点刻みの入試にこだわる必要などない」という発言もあった。だが、もし点数でなく段階評価する場合、5段階評価のAとBとの境界にある受験生は1点どころか10点以上の差がつく。Aの受験生を全員入学させるなら、厳しく定められている大学の定員管理との整合性が取れない。

出口の見えない改革の実務を担当する文科省や大学入試センターも、内心大いに当惑したはずだ。彼らは50万人という受験者が、人生を懸けて挑む大学入試の重みを誰よりも知っている。

誰も責任を取らないままAI採点はやむやみになった。国語も数学も記述式問題は、大学入試センターが定める基準に沿って業者が採点する方式に落ち着きそうだが、いまだ課題は山積だ。しかし朝日新聞の教育報道には、この間一度も新テストの実現可能性について、日程や採点要員等のロジスティックス・AI採点の可能性等の技術面を真摯（しんし）に検討した形跡がない。

英語での民間試験の導入についても同様だ。対象となるTOEFL等の民間試験を受検できるのは都市部に限定され、受検料は高いもので3万円近い。日本列島の隅から隅まで、どんな経済状況の生徒にも公平に機会を提供するテストの候補として明らかに不適格だ。「我が町の生徒は到底受検できない」と読者が一目でわかる記事を掲載すべきだった。業を煮やしたのだろう。昨年末になり、東北大学が「英語認定試験の受検とその結果提出を求めない」との方針

を静かに表明した。その表明文には、民間英語試験を公平に受検できる機会がない東北地方の生徒への配慮がにじみ出る。

*

私自身は現在のセンター試験で良いとは考えていない。しかし、それは今回の「教育改革」とはまったく別の文脈だ。まず、「簿記・会計」から「ドイツ語」まで実は30科目もある試験科目の多さだ。降雪で試験時間を遅らせる会場が毎年出る、綱渡りのような試験の全会場で30科目入試を提供する必要があるのか大いに疑問だ。

現状のセンター試験はトップ校にとっては易しすぎる。一方、中位校以下の大学の志願者にとっては難しすぎる。2～3パターン準備し、すべての大学にとって一定の学力保証ができるよう工夫したほうがよい。

大学入試センターは試験の検定料によって独立採算を取る機関だ。そして、毎年大過なく信頼性の高いテストを提供している。アメリカのSATやACTなどの試験に比べるとその質は極めて高く、まさに「考えさせる問題」だ。アメリカの大学人に、センター入試と2次試験が、大学教員の無報酬に近い活動で支えられていることを話すと、驚愕（きょうがく）する。

しかし、それにも限界がある。研究者の評価基準が論文一辺倒になったことで、研究者は大学入試や教養教育に貢献することへのインセンティブを失った。良質な中堅・若手作問者を確保することは年々難しくなっている。ボランティア精神を発揮して入試問題の作題を引き受けたとしても、ミスを犯せば今年の京大・阪大の出題ミス報道のように厳しく糾弾される。それほど責任を担わせるのであれば、国は入試作問を担当できる研究者枠分予算を設けて各大学に配分し、日本で現在行われている「世界一丁寧な入試」を持続可能なものにすべきだ。

あと2年だが、あと2年ある。社会の公器としての大学入試が、一部の「有識者」の思考実験の玩具にも、政治のキャンペーンの手段にもならないよう、メディアのしっかりとしたチェックを期待したい。くれぐれも両論併記のインタビューでお茶を濁したりしないように。

◇

1962年生まれ。国立情報学研究所教授。先月、ぐっちーさんとの共著「日本を殺すのは、誰よ！」を刊行。

■理数に冷淡では

新テストの助走として昨年11月、高校2、3年生を対象にプレテストが実施された。国語はきちんと読みさえすれば高得点を取れる内容だ。特に、古文や漢文は「源氏物語」などよく知られた題材からの出題で、文法の暗記の呪縛から解放された感がある。入試は平均点が極端に高くても低くても機能せず、100点中60点くらいになるのが良い。理数系は平均点が低すぎた。対話形式の出題が多すぎるなど、「新学力観」にとらわれすぎたことが原因だろう。

プレテストを報じる朝日新聞の論調を見ていると、国語には熱がこもるのに、数学と理科は予備校のコメント頼み。世界で理数系教育の重視が言われる中、誠に不可解だ。ぜひ朝日新聞

社会部教育班のみなさんには、「自ら考え行動する力」を発揮して、センター入試、プレテストともにチャレンジしていただきたい。

◆原則第3水曜に掲載します。次回は慶応大の山腰修三准教授です。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.